

河南省許昌 靈井石器群の研究

はじめに 2010年に奈良文化財研究所と河南省文物考古研究所（現・河南省文物考古研究院）が締結した「日中双方による河南省許昌靈井出土細石器の共同研究に関する協定書」にもとづく靈井遺跡出土石器の整理研究が終了したことから、ここに概要を報告したい。

靈井遺跡と日中共同研究 靈井遺跡（34° 4' 11" N, 113° 40' 23" E）は、河南省中南部、黄河と淮河の間に広がる黄淮平原に所在する。1965年に発見された中国の代表的な細石刃遺跡の1つ。2005年に河南省文物考古研究所が、研究員の李占揚を発掘隊長として発掘調査を開始し、現在に至っている。細石刃石器群は、調査開始からやや遅れて、2008年に再確認された。上記のように2010年に協定書が締結されたことから、李・加藤が日中双方のプロジェクト責任者として、石器群の整理と研究を進めた。

今回のプロジェクトでは、石器群の全体把握と主要な石器の資料化を目標とし、奈文研、東京大学、北海道大学、鹿児島市教育委員会などに所属する3人ないし4人の専門家チームを各年度2回程度、1回につき5作業日を目途に鄭州にある河南省文物考古研究所（現・河南省文物考古研究院）に派遣し、石器の観察、計測、実測を進めた。その結果、実測率は細石核で98.4%、二次加工のある剥片を除く小型ツール類で82.5%となった。

出土遺物 作業の結果、2010年度までに靈井遺跡で発見された細石器に関わると考えられる石器は2,338点であり、それらの内訳は表I-5のとおりであったことがあきらかにされた。このうち、大型石器関連資料とは、専ら礫器の素材となり、細石器等にはほとんど用いられていない石英岩、砂岩などの石材の石器である。この大型石器関連資料54点、小礫527点、彫器スポール5点を除く、1,752点中1,614点（92.1%）が燧石を素材としていた。

なお、今回実施した細石刃石器群に共伴した19点の炭化物・木炭に対するAMS測定値は、3点を除けば、 $11,300 \pm 50 - 11,940 \pm 50^{14}\text{CBP}$ （13,137-13,854calBP）に集中した。

靈井の細石刃技術 細石核63点を確認。そのうち、船底形のもの3点、楔形のもの1点を除くと、残り59点は

角錐状に分類できる（図I-13-1~6）。また、調整打面をもつ細石核が33点あり、かなりの頻度で打面調整がおこなわれていたことが判明する。細石刃剥離は、稜形成をした部位から開始されるもののほかに、ブランクの狭長な側面から始まるものも観察される（1）。そして、その後、打面縁にそって、細石刃剥離が進み（2・6）、条件がよければ、打面全周で細石刃剥離される（3）。また、2面以上の打面をもつものが11点あり、細石刃剥離が進むと打面転位がおこなわれたことを示す。さらに、打面再生剥片18点が確認され、作業面を割断した細石核（5）も存在するので、打面再生もなされたことが判明する。

細石刃131点中、完形品は23点。その平均長は1.97cm。角錐状細石核の平均高2.10cmによく対応し、細石刃が角錐状細石核から剥離されたことを示している。

以上の細石核の観察結果にもとづけば、船底形のもの3点、楔形のもの1点を除くと、いずれも剥片や礫片、小礫などを素材とする角錐状細石核であること、打面調

表I-5 靈井出土石器内訳

石器製作 関連資料	剥片（石刃・縦長剥片21点を含む）	1025	1742
	石核	34	
	礫片（原石を含む）	156	
	小礫	527	
細石刃関連 資料	細石核	63	262
	細石核打面調整・再生剥片	20	
	細石核原型	48	
	細石刃（稜付細石刃9点を含む）	131	
ツール類	搔器	84	280
	削器	16	
	ナイフ形石器	7	
	缺入石器	5	
	彫器	6	
	彫器スポール	5	
	尖状石器	3	
	鋸歯縁石器	1	
	楔形石器（両極打法関連資料を含む）	27	
	石錐	5	
	小型両面加工尖頭器	1	
	二次加工のある剥片	120	
	大型石器	礫器	
ピック		3	
スクレイパー・二次加工のある剥片		4	
石核・石球・石錘		22	
磨製石斧刃部片		1	
剥片		17	
合計（点）		2338	2338

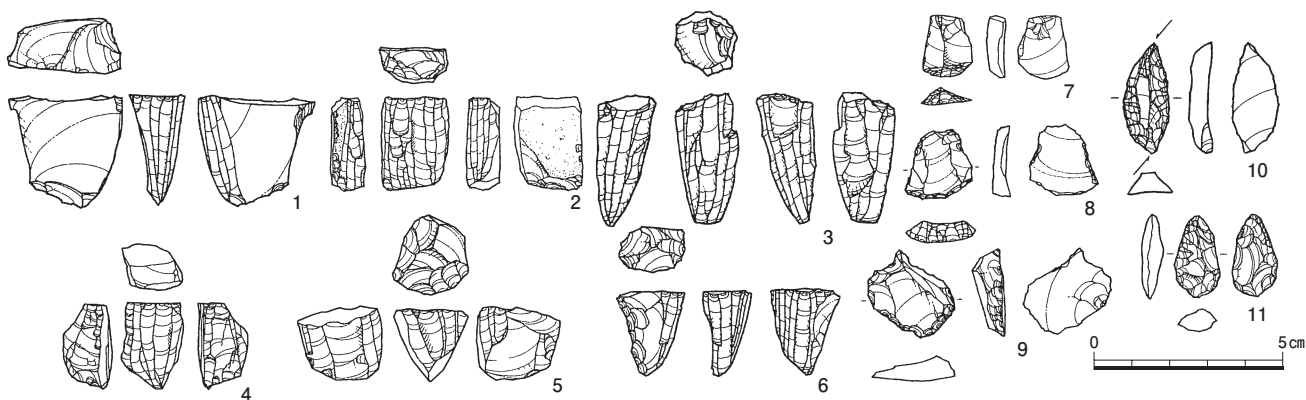


図 I-13 霊井遺跡の石器群

整、作業面上端（細石刃頭部）調整、打面再生、打面転位などの調整技術が駆使されることなどが判明する。細石核が示す、これらの特徴をもとにすれば、霊井の細石刃技術は、日本の本州南半で盛行した角錐状細石核である野岳・休場型細石核から細石刃を剥離する矢出川技法と極めて類似するものが主体となることがわかる。

黄淮平原の細石刃石器群 霊井遺跡が所在する黄淮平原とその近隣地区では、霊井のほか、細石刃出現期の登封西施（25calka）、細石刃終末期の舞陽大崗（S0層相当層出土）、新密李家溝（S0：10,500-8600calBP）の細石刃石器群が存在する（いずれも河南省）。

出現期の西施石器群は、角錐状細石核による細石刃技術をもつ。終末期の霊井とあわせると、こうした細石刃技術やそれを保持する石器群が、当該地域では細石刃期全期を通じて展開することが予想される。

終末期では、小型船底形細石核を多用する大崗、李家溝石器群が霊井石器群と並存する。これら石器群間では、一見、細石刃技術に差異がある。しかし、量や比率に違いはあるものの、各種細石核、小型両面調整尖頭器（図 I-13-11）、刃縁の一端が尖った拇指蓋状搔器（7・8）などを共有する。このため、これら石器群は、本来、同一技術伝統の石器群であり、石材環境の差などで、おもに運用される細石刃技術が異なると考えられた。

華北地域の細石刃石器群 霊井のような角錐状細石核によるものを主要な細石刃技術とする石器群（角錐状細石核石器群）は、黄淮平原以外の華北地域においても、出現期（陝西宜川龍王辿、寧夏彭陽PY03、河北玉田孟家泉など）から、終末期（山西榆社趙王村、北京懷柔轉年など）までみられる。同時に、黄淮平原同様、近隣に小型船底形細石核をもつ石器群が存在する。このことから、角錐状、船底形といった非削片系の類型を中心とする細石核をもち、石材環境にあわせて、多用する細石核類型を違えるものが、華北地域を特徴づける細石刃技術伝統であり、その下で形成される角錐状細石核石器群は、小型船底形

細石核を多用する石器群とともに、華北地域を代表する細石刃石器群であったと考えられる。

周辺地域の細石刃石器群 霊井で復元された細石刃技術は、西南日本の野岳・休場型細石核を利用する矢出川技法と類似する。また、華北地域におけるその初現は、矢出川技法の出現よりもはるかに古い。さらに、確実な角錐状細石刃石器群は朝鮮半島では知られていない。

西南日本における矢出川技法の出現はca.20kaとされるが、その時期は、LGMの海水面の最低下期にあたる。渤海湾、黄海、東シナ海は大きく陸化し、大陸-西南日本間の地理的障壁は極めて小さくなっていった。このことから、華北と西南日本の人間集団の接触がおこなわれ、それを通じて伝播した華北地域の角錐状細石核による細石刃技術に触発されて西南日本の矢出川技法が発生したという仮説を提示した。

おわりに 石器252点の実測図を含む挿図33プレート、石器476点の観察表、29,000字以上に及ぶ中国語原稿をすでに河南省文物考古研究院に提出した。今後、写真撮影や発掘調査に関わる報告執筆などの河南省側による作業を経て、正報告書として刊行される予定である。

また、今回の整理研究の過程で、霊井においても華北最古級の土器が出土していることがあきらかになった。これについては、科研費などを得て、新たなプロジェクトを立ち上げ、日中共同研究として進めていきたい。

（加藤真二・李 占揚／河南省文物考古研究院）

謝辞

本研究には、加藤・李のほか、森川実、芝康次郎、森先一貴、高倉純、長沼正樹、國木田大、赤井文人、尾田謙好が参加した。実測図のトレースは森川、芝がおもに担当し、加藤が補佐した。辻本あらた、美濃久美子、市原夕貴の皆さんには挿図作成などにお骨折りいただいたほか、加藤さんには中国語翻訳の労をおかけした。あつく御礼申し上げる。